



Title	二人のルーズベルト
Author(s)	渡邊, 侃; WATANABE, T.
Citation	法經會論叢, 14, 241-246
Issue Date	1955-10
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/10766">https://hdl.handle.net/2115/10766</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_p241-246.pdf



## 二人のルーズベルト

渡 辺 侃

米国大統領としての二人のルーズベルトを比較し、日米關係を論ずるのが小稿の目的である。昭和廿九年九月農業経済学会臨時大会が札幌で開かれた際、一般公開講演に「ルーズベルト大統領と吉田首相」と題して話したが、吉田首相のことは、フランクリン・デラノ・ルーズベルト大統領と相似る点が主腦者としての任期の長いこと位のもので、つけたりになつてしまつたから本稿では触れない。

ルーズベルトは和蘭出の家系である、ばら、の野、という意味で元來、ローゼフェルトと読んだのであろう。ローズヴェルトと読むのが本當のことである。しかし慣用に従う。どうせ外国語を仮名で表して正確な発音をさせようなど無理なことと思ふ。

二人のルーズベルトの一人はセオドア・ルーズベルトである。一八五八年に生れ一九一九年に死んだ。

明治四十年発行の札幌農学校文武会報第五〇号に、故森本厚吉先生が、米国から帰朝されて三回に亘る講演をされ、ルーズベルトのことを話されたと書いてある。セオドア・ルーズベルトは、当時世界の模範的人物とされ、故後藤新平伯爵の如きも和製ルーズベルトと称せられたほど、模倣者も多かつた。

セオドア・ルーズベルトは活動をモットーとし戦闘がすぎであつた。大学の卒業論文に米国一八二二年海戦史を書き、その後地方政治で活動中、ウィリアム・マツキンレー大統領から海軍次官に任命された。米西戦争が始まると、その職を辞して騎兵隊に志願し、従軍し

て勇名を馳せた。彼の率ゆる隊の名をラフ・ライダーと自称したが、悪くいうものはスタイル・ボーイ・チャージと称した。その後ニューヨーク州知事からマツキンレー大統領の副大統領に選ばれ、その死によつて一九〇一年に大統領になり、一九〇四年に再選された。一九〇九年退職してからアフリカで猛獣と闘つた。

地方行政から中央行政に一貫しての彼の政治は政界、財界の腐敗濫用を除くことで、彼は最初レバブリカンであつたが、党派と巨頭（タマニー、ウォールストリート、トラスト等）を打破することに努めた。陸海軍を強化することは彼の努力であつた。しかし政治的には統一と平和を図つた。

南北戦争時代、セオドアの父は北方ひいて、母は南方にかたを、持つたので彼自身その融和を考えた。彼の米国民に教ゆる文書には米国の統一の題目が多い。それは国内問題であるが、外国との交渉が多くなるだけ強化されたのである。彼の国際活動は明確で活潑であつた。一九〇二年南米ベネズエラに対する独逸カイゼルの運動の阻止、一九〇三年中米コロンビアからパナマが独立した際の行動、それはパナマ運河の掘鑿を結果したのであるが、いずれも極めて率直敏活であつた。侵略的とも評されるが、パナマ運河地帯の獲得以外に外国領土を侵すようなことはしなかつた。平和のために尽した功績は多い。一九〇五年に日露の間を仲介して講和させたことは、セオドア・ルーズベルトの世界的な功績となつている。

ここで日米の国際交渉をかえりみよう。

日本と米国の間は太平洋に隔てられて交渉がほとんどなかつた。天保十二（一八四一）年中浜万次郎が漂流したのを米船に助けられ米国に連行され近代的に教育され帰還したのがほとんど最初のようである。日本でも辺境土佐のその時代として無学の漁民が西洋文明の導入者であつたのは奇縁といふべきである。成心のない受容が適當であつたらう。嘉永六（一八五三）年ペリーの率いる米国艦隊が来てかなり強圧的に開国を要求したので国民の反感が甚しかつたが、それは日本に尊王攘夷の成心があつたからである。万延元（一八六〇）年米国に使節が派遣された翌年リンカーンが大統領になり日本庇護に努めた。日本に関するリンカーン大統領の記事はあまり多くない。あの大部のカール・サンドバーグのリンカーン評伝にも三行も出ていない程である。しかしリンカーンが日本に関心を持つた記事を彼の書いたものゝ内に見たことがある。

日本の明治維新（一八六八年）は尊王開國主義の実現で万国に対し、修交和平することであつた。しかし日本人は好戰的であつた。征韓論が出、西南戦争でおさえられた。

ついで朝鮮侵略を防ぐため中国と戦い、勝つて遼東に地歩を占めんとしたが、露・独・仏の三国干渉を受けて退いた。さらに露西亜に対し、中国及び朝鮮侵略阻止のため戦争を始め、最初勝利を収めたが、国力がそう長く続かず、終戦を欲し、米國に運動し、講和の仲介を求めた。幸にして極めて有利に講和が出来た。その際米國に対して何等かの謝礼をすべきであつた。セオドア・ルーズベルトがその要求をした事實はない。しかし米國民はギブ・エンド・テークの原則で来た。滿洲鐵道の経営權の買受を申出たのである。日本は一応これを許し後取消した。その後米國民は日本を以つて大陸侵略を企てるものとし、事毎に日本を庄迫する態度に出た。

一九〇七年米國艦隊が日本訪問をしたことは示威運動であつて、日本は一応歓迎はしたが、内心敵意を強くした。その間日本人入國制限や国内差別待遇の問題が出た。第一次世界大戦における日本の態度に対する攻撃が強くなり、國際會議が開かれ、その海軍擴張を制限し、日英同盟を破棄せしめ、青島を還付させた。また移民制限に際し日本人の入國を禁止した。これらの処置は日本をして憤激せしめたものであるが、日本としても反省の余地が大いにあることであつた。平和的なギブ・エンド・テークの外交原則を忘れてはならなかつたのである。それは現在でも否定されない。

セオドア・ルーズベルトは元來レパブリカンであつた。彼は第一回は副大統領であつて、大統領の死によつて当然にこれをついたのであり、ついで再選されて後隱退したが、一九一二年に新選を試みた。しかるにレパブリカンはタフトを候補に出したので、彼は別に進歩黨を組織して出たがデモクラットのウイilsonにまけた。

アメリカの二大政黨、レパブリカンとデモクラット、について時期を劃すると、前者は景氣時期の、後者は不景氣時期の政黨だといふ。おそらく十六年（四大統領任期）ぐらいで交替するであろう。しかしセオドア新選打出のときにレパブリカンが割れ、デモクラットのウイilsonが出たのは例外だそうで、それからしばらくデモクラットが支配し、遂に大不景氣が来たとも見られる。大不景氣時代に出た大統領がフランクリン・デラノ・ルーズベルトである。一八八二年生、一九四五年死で六十三歳生きた。

彼は一九三三年大統領に選出され、一九四五年その死に至るまで未曾有の四選をされた。初選の折、大不況の恢復策として新法

ニューディール

や弗平価切下等を行い、ついで第二次世界大戦の連合国主脳として英・仏・露をたすけて日独伊に無条件降伏を強い、そのほとんど成る際に死亡した。大不況恢復策が成功したとは見られず早魃や戦争が景氣恢復に最大効果をもたらしたといえる。しかし戦争が眞の平和を来らせず、資本主義国と共産主義国の対立のいわゆる冷戦を来らせている。F・D・Rは生時大政治家と見られ、ほとんど絶対的に信頼されたが、その後の批評は香ばしくない。

フランクリンもセオドアと似て、海軍次官を振出しにしたが、副大統領選挙に失敗し一時小兒麻痺で療養生活を送つた。後ニューヨーク州知事をつとめてから大統領に選出された。時期は大不況期で種々の対策が行われた。主なるものは、失業対策としての公共用役行政、<sup>パブリックワーク</sup>用役企劃行政、<sup>ジョブプロジエクト</sup>価格対策としての<sup>ナショナルレカバリー</sup>國勢恢復行政、<sup>アグリカルチュラアジャストメント</sup>農業調整行政であつた。國營事業としてテンネッシー<sup>アグリカルチュラアジャストメント</sup>穀谷開発が有名である。世界的な不景氣がその一原因たる独逸及び日本の周辺侵出に対する戦争がその重要な国外問題であつた。

独逸および日本の侵略行為の事實は否定出来ない。しかし特に日本は何等かの代償を与えられ面目が立てられれば大陸から手を引得たかも知れぬ。ボルネオかニューギニアを与えようとする企圖も米英の間にはあつたとも伝えられる。しかし大体において米英が結んで日本を威嚇圧迫したのである。米國が艦隊を布哇真珠湾に集中したことはその最大証拠である。またそれは米國にとつて損なことであつた。集中攻撃の目的点が出来たからである。

米國人特にF・D・Rは日本が宣戦せずして「欺し打ち」トレッツチャラス、アタックをかけたと呼び、それに米國民が憤激して開戦し、日独に対し全面降伏を要求した。しかしF・D・Rがその以前日本を圧迫する外交政策をとつたことは米國民の少くも一部は認めてい<sup>クオランテン</sup>る。防疫という言葉が日独の行動に対抗する意味で用いられた。(F・D・Rの炉辺談話にある)米國では宣戦も議會が決議するから与論をその方に導いて行かねばならぬ。その力と策がF・D・Rに強かつたというべきである。戦争を始めると、F・D・Rとウインストン・チャーチルが太平洋憲章を相談し、四つの自由、即ち、言論及び信仰の(オブ)自由、欠乏及び恐怖からの(フロム)自由を確保することを称えた。戦争を始めるとは恐怖を起さすものとしたのである。

F・D・Rは日本及び独逸を最初弱いものと見くびり、後に強いものと恐れすぎたといわれる。最初威嚇によつて行動を停止させようとした。後には露西亜に援助を送り独逸に抵抗させ、日本に宣戦せしめた。ヤルタ会談で露西亜に巨大な利益を約束した。この時には

F・D・Rは死期近くで疲れきつていたから、ただ戦争の終結を欲し、その後の困難を考えなかつたと思われる。彼の死後のことであるが、ポツダム宣言承諾遅延で原子爆弾の最初の犠牲を日本に強いた。独逸は三分され朝鮮は二分された。米国が援助した中国国民党政府は台湾に退き、中国も二分された形になつた。日本本土が分割されなかつたことは誠に有難いことであつた。しかし思想と社会運動において日本が混乱させられていることに勝利者の責任がないではない。

二人のルーズベルト大統領に共通する特に農業関係の政策は保全(コンサーベーション)である。セオドアは天然資源の保全、フランクリンは土壤保全を主張した。セオドアが天然資源と見たものゝ第一は水であつた。水は個人財産ではなく、国家財産である。水力を起し土地を灌漑し舟運を与える。水源を養うものは森林である。土壤及び鉱物が次のものである。最後のものは有限の資源で最も濫用されると見た。しかし事實は、石炭が掘り尽くされぬまゝに殆んど無限の石油資源が利用されつゝあり、更に原子力資源の利用が進むとなれば資源は無尽のものだとさえ考えられる。資源よりは人智が大切となる。フランクリンの主張した土壤保全は農産物の過剰供給防止のためであつたと思われる。元来不景気恢復を減産による高価に求めた新法が、米國憲法違反だとの判決を受けたので、代りに土壤保全のため中耕作物減少と草地林地の増加を奨励したのであるから、そう解される。第二次大戦以来、土壤保全など忘れて増産していることが、世界の救済であつたが、漸次脅威になつている。農産物価格保証政策は不評であるが農民の人氣を取る政治家が多いから継続されている。

大戦争の後、十年景気が続き、後十年位不景気が続くのが、第二次大戦後の経験である、第二次大戦後約十年たつたが、米国にはまだ不景気は来ていない。政壇はレパブリカンが勢力を保つている。新法論者は、第一次大戦後十年位して起つたような恐慌沈滞は、国費を使えば防げると主張している。景気が下らない理由は、原子力平和利用の進行で新企業が企てられていることも一つであろう。しかし大きな景気は戦争時にしか起らない。日本は朝鮮の戦争で大いに利した。その後、インフレ政策があれば景気が出るように考えるものがあるが、不健全なことである。緊縮こそは必要事である。

## 附記

本稿の要旨を六月十一日たまたま講演のため来札された東京大学のフルブライト交換教授の、ベンシルベニア・アーシナス  
大学教授 E・H・ミラー氏と論じあつた。氏によると、セオドル・ルーズベルト（氏の発言ではローゼフェルトに近かつた）は、  
米国外交の本筋のものに属せず、小數群に属したものである。フランクリンの方が本筋で、ただ彼に行過ぎや錯誤があつたる  
うとのことである。氏はレパブリカンでなくデモクラットであろう。原則としてカナダを除いた中南米州諸国共に、米国内の  
各州に平等な権利が認めらるゝことが合衆国の独立以来の伝統である。合衆国がまだ弱体のときは、欧州の問題に口を出さ  
ず、欧州からも干渉させなかつた。合衆国が強くなつてからは、世界各国の平等、独立、自由を尊重する立前で、干渉するこ  
とになつたという。しかし、カリビアン諸島や、フィリピンや、ひよつとすると台湾、朝鮮、日本までが独立させられるため  
に米軍が駐留し、實際の独立が出来ぬ現実があることを認めてはおられた。氏の立場はデモクラットである。その講演懇談  
が小林教授の法学部長室で行われたことを縁として、教授の農学部農業経済学教室の同僚として教授の勤続を記念する論文集  
にこの小文を捧げる。（昭和三十年六月十三日）